＜報　告＞

日本統治時代の台湾生活誌（XIV）

柴　　公　　也

（54）官吏の道

林　錦章（1917 年生）鹿野小学校高等科卒；台東庁官吏

私の先祖は、乾隆帝（＊在位；1735～1796）の時代に広東省の梅州の山奥の蕉嶺県から移民してきた客家人です。代々、高雄州の萬巒庄で農業に従事しておりました。私が子供の頃、台東庁の鹿野庄に移住してきました。鹿野庄は、製糖会社による内地人の移民村でした。内地人は、生活は豊かではありませんが、日本家屋を建て、質素でしたが堅実に暮らしておりました。家屋は茅葺きの平屋でした。

鹿野庄は、電気は通っていませんでしたが、水道は山の清水をタンクに溜めて、それを各家庭に引いておりました。電気が通ったのは終戦後で、それまではランプの生活でした。道路は砂利道でしたが、1933 年頃からバスが通り始めました。寺や教会はありませんでしたが、小さな鹿野神社がありました。台湾人の雑貨屋が一軒ありましたが、内地人やアミ族の雑貨屋はありません。

父と母は再婚者同士で、父には 5 人の子供、母には 4 人の子供がいましたが、私は父の方の長男です。父は、書房に二年間通っただけで公学校には通いませんでした。母も客家系でしたので、纏足はしていませんが、全くの無学です。父は製糖会社の雇員でしたが、また陸稲とサトウキビの栽培もしておりました。

鹿野では、台湾人と内地人の部落は別でした。ただ、台湾人と内地人やアミ族との関係は悪くはなく、治安も良好でした。警官の中には台湾人の警官もいて、夜部落を巡回していたのです。警官は恐れられていましたが、悪いことをしなければ捕まることはありません。また、悪事を働かない若者や娘が警官や軍人に強制的に連行されて行ったというような噂は聞いたことがありません。当時の台湾は、現在の中国よりも真っ当な法治社会だったのです。

私は、1924 年に台湾人やアミ族の通う鹿野公学校（＊四年制）に入りました。鹿野公学校は木造の平屋で、講堂はありませんでした。月謝も台東庁の公学校だったので、ありません。先生方は、内地人の他にも台湾人や農林学校を出たアミ族の先生もおりました。台南師範を出た人もいましたし、教員講習所や高等科を出ただけの先生もい

ました。ただ、女の先生はおりませんでした。

一年の時は、台湾人の先生で、二年から四年までは内地人の先生でした。私は、一年の時から先生とは日本語で話しておりました。ただ、学校の中では日本語ですが、学校の外では、それぞれの民族語で話していました。三年頃になると、学校で客家語やアミ語で話せば叱られるようになりました。便所掃除を一週間言い付けられたりしましたが、叩かれるようなことはありませんでした。

日本語は、一年の時から習いましたが、漢文は習いませんでした。私は客家語の他にも閩南語も出来ますが、アミ語は出来ません。アミ族は農業に従事して、水田を耕作しておりました。土地を沢山持っていましたから、漢族よりも裕福でした。アミ族の住居は、木造の茅葺で四隅に竹の寝台があり、中央に炉が切ってあります。

鹿野公学校は、一クラス 40 人ぐらいでした。男女は一緒でしたが、席は別で左右に分かれていました。台湾人は少なく、6〜7 人ぐらいしかおりませんでした。女の子は 7〜8 人でしたが、台湾人の女の子は一人だけでした。私は、一年から成績はずっとトップで、級長を務めていました。

アミ族は、一年の頃から日本語で話しておりました。また、アミ族も教科書や文房具は自分で購入しています。アミ族は貫頭衣のような半袖の民族服を着ておりましたが、靴はなく裸足でした。風呂敷に教科書を包み、籐で編んだ弁当箱に御飯を詰めて持って来ておりました。アミ族は手で摑んで食べていましたが、徐々に箸を使うようになりました。

台湾人は台湾服に裸足でしたが、私は内地人の通う小学校に入ってからは下駄を履いています。弁当は、アルマイトの箱に御飯を詰めて持って行きました。台湾人とアミ族は習慣が違っていましたが、民族の違いではなく、子供同士の喧嘩をすることはありました。

アミ族は、「ウグイ」とかいう民族名でしたが、中には日本名を名乗っている者もおりました。私は、公学校では「りん　きんしょう」と、日本語の漢字音で呼ばれていましたが、小学校では、姓だけで「りん」君と呼ばれるようになりました。

運動会や学芸会はありましたが、父兄は参観に来ることはなく、学校内の行事でした。ただ、朝会は毎日あって、三年頃からは、生徒に即題を出して話をさせる訓練をしておりました。これは非常に良い訓練になったと、今でも感謝しています。宮城遥拝はありませんでしたが、1928 年の昭和の御大典の時には、紅白の餅をもらいました。また、神社参拝があって、一週間に一回先生に引率されて鹿野神社に参拝しています。

日本の天皇については、世の中で一番偉い人と思っていましたから尊敬していましたが、清朝の皇帝については、全然関心がありませんでした。また、学校に通わない台湾人にとっては、清朝の皇帝はもちろん、天皇に対してもあまり関心はなかったよ

うです。毎日の生活で精一杯だったからです。ただ、学校に通わなかった人でも、自分たちは支那人ではなく日本人だという意識はあったようです。当時は、まだ軍国主義の時代ではなく自由な雰囲気で、戦前では一番良い時代ではなかったかと思います。

私と二人のアミ族の同級生が、内地人の子弟の通う鹿野小学校（＊六年制）に転入することになりました。ただし、学力が足りないからという理由で、四年生にもう一年通ってから五年生に転入させられました。鹿野小学校は、私の家から歩いて 20 分位の所にありました。校舎は木造の平屋で、全校で 40 人ぐらいの複式の学校でした。学校には、山地勤務の警察官の子弟のための寄宿舎がありました。小学校は、公学校と違って月謝（＊学級費か？）を取っておりました。

転入の日、担任になる鹿児島出身の先生は、朝会が終わっても我々三人を教室に入れず、なんと廊下に立たせたまま授業を始めてしまいました。見かねた他の先生のとりなしで、ようやく教室に入れてもらいましたが、先生は台湾人やアミ族を入れるのは喜ばなかったのでしょう。結局、アミ族の一人は一ヶ月ほどで辞めてしまいました。ただ、頭目の息子は残って高等科に進み、後に警手（＊巡査補）になっています。その先生には、初めは差別されましたが、歴史の授業が面白かったので、後では好きになりました。

小学校では、同級生の内地人から苛められました。私は成績は良かったのですが、体格が貧弱でしたので、最初は殴られっぱなしでした。アミ族の級友は、体格が立派でしたから苛められませんでした。ただ、五年生の三学期に相撲の授業が始まってからは、私の強いことが判ったので、苛められることはなくなりました。小学校での服装は、学生服に運動靴や下駄を履いていました。カバンはズックの肩掛けカバンでした。五年生の秋には、霧社のセイダッカ族が反乱を起こして内地人が 130 人余り殺害されるという、台湾統治史上最大の抗日事件が起きています。

卒業式の時、先生に「君は、勉強は出来るけど……」と言われて、一番にはなれず、二番に止められてしまいました。ただ、どうした訳か賞品は三番の物でした。最優等賞は、公学校の校長の娘に与えられました。卒業後は、花蓮港高女に進み、台北師範の女子演習科を出て、新竹の小学校の訓導になっておりました。

私は、卒業後無試験で高等科（＊二年制）に入りました。月謝は、月 30 銭でしたが、母が野菜の行商で出してくれました。高等科には、同級生の大部分が進んでいます。高等科には英語はなく、国語、代数、幾何、修身、歴史、地理、農業などを習いました。ただ、高等科から上級学校に進んだ者はおりません。当時の台東の田舎では、高等科で充分で、自分も親も、それ以上は望まなかったのです。

私の弟は、高等科を出てから台南師範に進み、公学校の訓導をしていました。それが、途中で海軍の志願兵になってしまいました。他の志願兵は南方に送られましたが、弟は軍隊長付きになりました。さらに予科練に志願し、1500 名の志願者のうち 50 名

という難関を突破して、鹿児島に配属されました。その後は、霞ヶ浦で終戦を迎えたそうです。妹は公学校に入りましたが、高等科には行かず、家で母の手伝いをしているうちに結婚しました。

私は、高等科を出た後、一年間家で農業に従事しておりました。それが、鹿野小学校の校長が鹿野庄の庄長になったので、その伝手で庄役場の書記になりました。17歳の時でしたが、日当は40銭でした。日雇いの日当が50銭の時代です。

1940年には、公吏として判任官になり、本給も内地人と同じく45円になりました。ただ、台湾人なので外地手当ての六割の加俸はありませんでした。同じ年の12月には、花蓮港の市役所に三ヶ月間派遣され、次いで花蓮港庁の鳳林郡の財務主任に補されました。本給も60円を支給されるようになりました。昇級試験はなく、日本大学の法政学科の講義録を取り寄せて勉強していましたが、仕事が忙しくて一年ぐらいで止めてしまいました。

この頃、鹿野庄長に呼ばれて、「林君、君、改姓名したまえ」と勧められたので、家族と相談して、楠正成の「櫻井の驛」の故事から「櫻井章」と名乗ることにしました。ただ、母は、「名前を変えても、台湾人は台湾人だから、する必要はない」と言っておりました。私は、内地人の中で仕事をしていましたから、別にどうと言うことはなく、改姓名しても、自分は台湾人だという民族意識は依然として変わることはありませんでした。

台東庁の勧業課長は台湾人で奏任官でしたが、改姓名して内地人の養子になっておりました。それでも、周囲の人からは「あの人は、本当は台湾人だ」と陰口を叩かれておりました。ですから、私も「台湾人は、いくら日本名を名乗ったとしても、台湾人は台湾人だ」と思っていたのです。それでも、台湾の独立とか支那への復帰などは夢にも考えたことはありません。実際、昔の生活を体験している年配の人たちからも清朝時代を懐かしむ声は一度も聞いたことはありません。当時は、治安や衛生の面で相当に劣悪だったのでしょう。

ただ、「台湾人に生まれて情けないなあ」とは思っておりました。内地人の同僚が出征するのを見送る時は、台湾人に生まれついたので、最初から軍隊には行けないと思っていました。ですから、行かずに済むから嬉しいとか、自分も行きたいとかは思いませんでした。ただ、台湾人にも兵役があった方が内地人に対して引け目を感ずることはないですから、あった方が良かったのではないかとも思っております。

1942年に、公学校時代の先生が財務担当の主任になりましたが、先生は財務関係が苦手でした。それで、先生は困った時は自分が責任を持つからと言って、私を財務担当の農会書記に据えたのです。台東庁で台湾人が書記になったのは、私で二人目でした。翌年、結婚して身を固め、与えられた仕事を万全にこなすべく、日夜奮闘しておりました。

私は、「財務の権威」と呼ばれたほど仕事が出来ましたので、上司には大変可愛がられました。私は、鹿野庄でも台東庁でも、昇任試験を受けたことはありません。全て実績を上げて認められた結果でした。ただ、昇進の面では差別されていたという感は拭えません。自分より明らかに仕事の出来ない内地人が先に昇進していきましたから、台湾人は内地人以上に仕事をしないと認められませんでした。それで、私は「内地人がやれないことをやって見せる」という気概で、毎日の仕事に取り組んでいたのです。

また、私は台湾人でありながら人事も任されておりました。役所で最も難しい仕事である人事を任されていたということは、それだけ内地人の上司に信頼されていたということの証左でしょう。内地人の部下は、私の指示に忠実に従ってくれました。部下の中には、女学校を出たばかりのタイピストもおりました。当時は、御歳暮はありましたが、賄賂はありませんでした。公私のけじめが厳しかったのです。

台東の街は、電気や水道は通っていましたが、道路は中心街でも砂利道でした。ただ、市外バスが近隣の庄との間を走っていました。市街地では内地人と台湾人が混住していて、表面的には友好的に過ごしておりました。

ただ、台湾人と内地人の間の文化の差は大きく、結局 50 年かかっても埋めきれませんでした。当時は警察が厳しかったので、治安が良かったのですが、派出所で殴られるのは決まって台湾人で、内地人が殴られることは、まずありませんでした。また、台湾人は、大掃除の時に行き届いていないと叩かれました。内地人は甲種巡査でしたが、台湾人は一階級下の乙種巡査が大部分でした。それでも、中には普通文官試験を受けて警部になった台湾人もおりました。

ある時、汽車に乗って台東の北方の海端駅に停車していたところ、一杯機嫌の大工箱を担いだ 50 代の内地人の男が乗り込んで来て、向かい合わせに座ったことがありました。その男が私たちに向かって「お前たちは、洋服を着ているがチャンコロだろう」と嘲ったのです。偶々、刑事が乗り合わせていて、その男に向かって「貴様、何を言うか！」と怒鳴りつけ、黙らせたということがありました。

大東亜戦争が始まると、台湾にも配給制が布かれるようになりました。配給の切符を持って行って必要な物資を購入するのですが、台湾人と内地人の間には別に差別はなく、米や肉も同等に分配されておりました。ただ、砂糖などは内地人の方が消費が多いので、台湾人よりも多めに配給を受けていたぐらいです。戦局が深まるにつれ、金属類の供出も始まりましたが、これは強制ではなく、あくまでも自主的なものでした。ただ、金属類の代価は支払われませんでした。

1945 年になって、台湾人にも加俸が付くようになりました。それに家族手当 30 円と戦時手当ての 10 円が付きましたから、計 120 円の収入がありました。当時としては高給取りでしたが、戦時下の物資不足で買う物がなかったので、裕福になったとい

う実感はありませんでした。1938年頃までは、物価も安定していて物資もあったので、その頃の方が生活は楽でした。

また、戦局も終盤を迎えて台湾人にも徴兵制が布かれることになりました。その際、台東の街長が職員たちを集めて、「本島人（＊台湾人）にも徴兵が始まったが、これで母国人（＊内地人）と同じになったと思ってはいけない」と訓示したということを知人から聞いたことがあります。一視同仁の精神で徴兵したというのは建前で、一般の官吏の本音はあくまでも内地人が台湾人を指導するというものだったのでしょう。

ただ、当時の長谷川総督は一視同仁の精神を体現しようとしていたようで、山林課の奏任官であった台湾人の豊岡（＊劉茂雲）課長を勅任官に昇任させようとして、山林課を山林部に昇格させることにしたそうです。それで、総督府の審議室の書記官に、「台湾は、森林が多くて水資源も豊富だから、山林課を山林部に昇格してもらうように内務省に申請せよ」と命じたのだそうです。

すると、台湾人が勅任官に昇任するということに対して不快感を覚えた奏任官の書記官は、総督の意向通り申請を出したのですが、同時に友人である内務省の担当者に「申請を却下してくれ」という手紙を出して、結局その申請を却下させたのだそうです。後で、却下されたことを知った総督は烈火のごとく怒って、「もう一度申請せよ」と命じて、今度は「山林課長たる書記官は勅任とする」というふうに官制を変えることで、豊岡さんを現職のまま勅任官に昇任させたのだそうです。その書記官は、後で辺地に飛ばされたとのことです。この話は、豊岡さんの婿で、東京帝大出身で高文官試験に合格して内務省に勤めていたが、辞めて台湾の総督府に勤めることになった台湾人から聞かされたものです。その人は、「内地では全然差別がなかったのに、台湾では差別がある」と、台湾に帰って来たことを後悔している様子でした。

また、ある時、台北の総督府に用事があったので、勧業課長に面会しに行ったことがあります。用事が済んで、台湾農業会の指導部長になっていた豊岡さんに面会しようと思って、農業会に行きました。受付にいた30前後の内地人に「豊岡部長はいらっしゃいますか」と尋ねたところ、その内地人は、「ああ、あれか、そこにおるよ」と、隣の部屋とは薄いガラス一枚で声が聞こえるというのに、傲慢な態度で答えたのです。

高砂族は、1941年頃まで、時折反乱を起こしていましたが、国民党の時代になってからは、一度も反乱が起きていません。これは、日本が異民族統治の経験が乏しかったのに対し、支那は元々多民族の国で、異民族統治のコツを知っていたからです。高砂族の場合、山地に閉じ込めて教育所以上の教育を受けさせず、役人にも採用しませんでした。せいぜい警手になるのが関の山でした。ですから、向上心のある高砂族が不満を募らせていったのです。

国民党は、高砂族の行政は高砂族に任せ、高砂族でも街長や庄長に据えて議員にもなれるようにしました。高砂族の首長の下で漢族が働くような体制にしたのです。こ

の点が、何でも自分たちの思い通りにならないと気の済まない日本の統治とは違う所でしょう。

終戦の時は、台東庁の属官として財務担当の書記を務める判任官でした。敗戦の報に接した時は、既に負けるということは解っていましたから、「やっぱり負けたか」という感じでした。ただ、別に嬉しくはありませんでした。支那は、政治が腐敗して内戦が続き、落伍した国家だと思っていましたから、支那と一緒になるのは嫌だったのです。実際に支那の兵隊を目にした時は、余りのだらしなさに本当に落胆してしまいました。

終戦後も台東県の官吏として勤めましたが、インフレが激しくなって生活は大変でした。その点、日本時代は物価が安定していたので、生活は楽でした。ただ、戦争の末期には、物資が不足して生活には困っておりました。日本時代は、法律に従って仕事をしていれば良かったので、国民党の時代よりは仕事がやりやすかったという気がします。

（55）パイワン魂は永遠に

陳俄安（民族名；カビヤガン・チングアン）（1922 年生）高雄商業卒

私の父は、パイワン族の貴族（＊パイワン族には貴族階級と平民階級の二つの階級があった）で、高雄州の山地の三地門郷の首長（＊頭目の上の役）を務めていました。首長は、権威だけではなく土地や財産も持っておりました。母も貴族の出ですが、両親とも学校がなかった時代に育ったため日本語は出来ません。きょうだいは 5 人ですが、上に兄と姉が二人いて、下に弟が一人います。父の後に、兄が首長の座を継ぎましたが、私は次男なので、頭目の役に就いています。

パイワン族には、首狩りの習慣がありました。祖父は実際に首を狩ったことがあるそうですが、父や私は狩ったことがありません。また、家族が死ぬと屋内に屈葬で埋葬していました。刺青の習慣もありましたが、タイヤル族とは違って顔には入れず、手の甲や背中などに入れておりました。また、抜歯もありません。

当時は、焼き畑で粟やサツマイモ、それと陸稲などを栽培し、山では猪や鹿を狩り、川では魚などを獲って暮らしておりました。食べ物に不足することはなく、石板を重ねて造った家に住んでいましたが、それなりに満足した生活を送っていたのです。

私は、8 歳で三地門教育所（＊山地先住民の子弟の教育施設）に入りました。教育所は茅葺きの平屋で、教室は一つだけでした。山地の警官である内地人の先生が、一つの教室で一年から四年までの生徒を教えるという複式の学校でした。一年の生徒が勉強している時は、他の生徒は自習するというものです。入所した時、全員で 41 人いましたが、女の生徒は 14 人だけで、男女の席は別でした。

先生は、鹿児島と熊本の人でした。鹿児島の先生は大変優しい人でしたが、熊本の先生は大変厳しい先生で、よく叩かれました。教育所では、国語、算術、修身、唱歌、体操などを習いましたが、歴史や地理、理科などは習いませんでした。また、算術は掛け算は習いましたが、割り算は習っておりません。日本語は、二年生頃にはある程度話せるようになっていました。

授業は、午前は8時から12時までで、午後は昼食時間を挟んで2時から4時までした。また、昼食は家に帰って食べておりました。帽子などはなく民族服で、足は裸足でした。教科書は、籐で編んだカバンに入れて通っていました。教科書やノート、鉛筆などは教育所から無料で支給されておりました。ただ、先生は山地の警察官も兼ねていたので忙しく、午後の授業を休んだりして余り熱心には教えてくれませんでした。

教育所でも運動会があって、親たちも観戦して応援し、一緒に弁当を食べて楽しんでおりました。運動会は、娯楽の少ない山地での家族全員が参加できる一大娯楽イベントだったのです。学芸会もあって、歌を歌ったり踊りを踊ったりしていました。

家には電気がなかったので、夜は暗くて勉強できませんでした。私は優等生で、級長を務めておりました。成績が優秀で首長の息子ということもあって、四年終了で高雄の商業学校（＊三年制）に推薦で入学することになりました。私のきょうだいは皆教育所を卒業していますが、上級学校に進んだのは私一人だけで、三地門郷でも初めてのことでした。私は入学する際に、名前をそれまでの民族名の「カビヤガン（＊屋号）・チングアン（＊個人名）」から、日本名の「坂本謹吾」に改名しています。

高雄商業は赤レンガ造りで、二階建ての立派な校舎でした。先生は、内地の専門学校を出た優秀な方々でした。高雄では、小学校の先生の家に三年間下宿しています。同級生は30人でしたが、内地人が24人で台湾人は5人でした。先住民は、私一人だけです。他の同級生は皆小学校や公学校の6年終了でしたが、私だけが4年終了で入学しています。そのため、私だけが地理や歴史、それと理科なども学んでおらず、一年の時は、ビリかビリから二番目でした。

このままでは同級生に馬鹿にされると思い、パイワン族の誇りに懸けて一所懸命勉強しました。猛勉強した甲斐あって、卒業の時には12番で卒業しています。商業学校では、国語や修身の他、漢文、幾何、代数、理科、歴史、地理、算盤、簿記などがありましたが、英語はありませんでした。時には、同級生から「生蕃」と悪口を言われて喧嘩したこともありましたが、普段は仲良く付き合っておりました。

私は運動が得意で、野球では唯一の先住民でしたが、ピッチャーを務めていました。他校との対抗試合では、腕も折れよとばかりに力投していたのです。また、脚にも自信があって高雄州の高雄中学、高雄工業、高雄商業の三校対抗競技会では、パイワン魂を発揮して1500メートルで優勝したこともあります。また、高雄から屏東までの

駅伝大会にも参加して、並木道の街道を力走しています。軍事教練もありましたが、教官にはよく殴られておりました。

高雄商業を卒業して、高雄州庁の文書課に雇の資格で入りました。16 歳の時で、先住民は私が初めてでした。月給は確か 15 円でした。当時、州庁の役職は、ほとんど内地人で占められておりました。これは、内地人の上役が内地の大学や専門学校を出た人たちでしたので、仕方がないと納得しておりました。仕事は、文書の整理や管理でしたが、ただ一人の先住民ということもあってか、上役には可愛がられました。

州庁には三年間勤めましたが、19 歳で退職し、高雄州の山地勤務の警手になりました。初任給は 30 円でした。21 歳の時、理蕃課長に普段の精勤ぶりが認められたからか、台北にある「警察官及び司獄官練習所」に入所するようにと言われました。それで、練習所を受験することになりました。高雄州からは 6 名受験して 2 名が合格しましたが、先住民は私一人だけでした。最初の先住民の合格者だったのです。

練習所の同期生は 41 人でしたが、内地人が 36 人で、台湾人は 4 人、先住民は私一人です。学校では巡査練習生として、法学通論、刑法、民法、刑事訴訟法、それと各種の警察法などを学びました。先生方は、台湾全島から選抜された警部クラスの優秀な人たちでした。

一部屋に 12、3 人が同室していましたが、寝室とは別に自習室がありましたので、夕食後は消灯の時間まで寸暇を惜しんで勉強していました。6 時に起床して、8 時半に授業が始まって 4 時に終了し、放課後一時間の自由時間がありました。日曜と祭日は休日で、外出が許されていました。五か月間の教育と訓練でしたが、軍事教練や武道もあって、私は剣道を選択しました。また、試験もあって、落第もありましたから皆必死になって勉強しておりました。一時は、修了できないのではと不安になったこともありましたが、必死になって頑張ったせいか、無事警察官部の乙科を修了できました。

台北の練習所での講習を終えて、郷里の三地門郷から山を越えて東方に 10 キロほど離れた霧台郷（＊ルカイ族の村）の駐在所に、乙種巡査として勤務することになりました。昭和 18 年の 5 月のことです。正式の巡査となったので、両親の勧めもあり結婚することにしました。相手は、一つ年下の霧台郷のルカイ族の娘で、仕事の関係もあってお互いに顔見知りになっておりました。妻の名前は、民族名で「ルバルバ」、日本名では「セツ子」、漢族名では「陳阿修」です。ルカイ族は、パイワン族とは言葉こそ違いますが、文化や習慣が似ております。それで、部族の壁を越えて結婚したというわけです。結婚式は、私は警官の制服で、妻は着物でした。妻も教育所を出ていたので、家では共通語の日本語で話しておりましたし、揉め事などもありませんでした。

住居は、内地人の巡査と同様に警察官舎ですが、畳の部屋や風呂もあり、食べ物も

内地人と変わらぬ生活をしておりました。服も皆配給で、着物や浴衣、それに下駄もありましたし、妻は着物を着ておりました。月給は、本給が30円で、山地手当が18円付きましたので、合計48円にもなりました。両親は健在でしたが、一緒には住まず、まだ子供がいなかったので、生活には十分すぎるほど余裕がありました。

山地では、内地人の巡査と組になって勤務しておりました。山地の治安は大変良好で、人殺しや泥棒は一件もありませんでした。せいぜい喧嘩の仲裁をすることぐらいが、警察官としての仕事だったのです。内地人の同僚とは親しく付き合い、時にはマグロの刺身を肴に、内地からの配給の日本酒を酌み交わすこともありました。

事件らしい事件はなかったので、山地の巡査は、警察業務よりも生活改善や農業指導などの授産指導の業務が主たる任務となっていたのです。実際、山地で勤務する者は、身分上は全て警察官ということになっていました。それで、教育関係や建築関係、衛生関係の専門家も、全て巡査として働いていたのです。

敗戦には、全く残念無念という思いでした。私は召集されたら、パイワン魂で最後まで戦い抜く覚悟でいたのです。日本は戦争に負けたと言われています。確かに、アメリカには原爆を二発落とされてやむを得ず降伏しましたが、支那との戦争には負けていなかったと思っています。それは、国民党の兵隊がみすぼらしい綿入れのような服に草履を履き、鍋釜を背にしていたのを目撃したからです。

結局、台湾は国民党のものになり、「台湾は光復した」と宣伝していましたが、私から見れば、「台湾は不幸になった」としか言いようがありません。本当の台湾人は漢族ではなく、私のような先住民なのです。日本人の先生には、「正直は一生の宝」と教わりましたが、現在の台湾は、「正直は一生の馬鹿」です。やはり、日本のままの方が良かったと、今でも思っております。また、二・二八事件の時は、山地にいたので難を逃れています。

私は終戦後も屏東県の警察官として勤務し、警察署長も務めて、60歳で定年退職しております。現在は、毎月三万元の年金を支給されており、食堂も経営していますから、生活には何も不自由はありません。また、パイワン族の伝統と文化を保存するために、私設の「陳俄安博物館」を建てて、その館長も務めています。

終戦後は、台日警友親善協会に属していましたので、日本には北海道から沖縄まで毎年のように何度も往来しています。靖国神社には、東京に行くたびに参拝していますが、社殿に上がって拝礼したこともあります。また、昭和天皇の誕生日に皇居に入り、5メートルぐらいの至近距離でお顔を拝して万歳三唱を唱えたこともあります。

2010年の5月には、パイワン族の伝統工芸の紹介などを通じて台湾と日本の相互理解と親善に多大な貢献をしたとして、日本の天皇陛下から旭日単光章を授与されました。台湾の先住民としては初めての栄誉でした。伝達式は、高雄の日本人学校で行われ、高雄の総領事（＊日本台湾交流協会高雄事務所所長）から勲章を頂きましたが、

それまでの苦労と努力が一瞬のうちに報われた思いでした。

また、後日談があって、受章のお礼のために、2012 年の秋に孫と一緒に皇居に参内しております。当時の文部科学相の田中真紀子氏に伴われて、天皇陛下に拝謁いたしました。5 分間ぐらいの短い拝謁でしたが、台湾の先住民を代表して、陛下から過ぎし大戦における高砂義勇隊の労をねぎらっていただきました。まことに身に余る光栄に、涙が出るほど感激いたしました。

現在は、長年連れ添った妻には 84 歳で先立たれてしまいましたが、玄孫の二人を含めて 30 人を超える子孫たちに囲まれ、悠々自適の毎日です。今は、博物館の館長として静かにお迎えの日を待っております。

（56）台湾から石垣島へ

玉木玉代（＊漢族名；石玉花）（1928 年生）

私は、戸籍上は 1929 年生まれですが、実際には 1928 年に、日月潭の近くの頭社の福建系の貧農の黄家に生まれました。両親は教育を受けていませんから、全くの文盲です。ただ、母は貧しかったので力仕事もしなければならず、そのため纏足の陋習は免れております。

私は 6 人きょうだいの五番目で、下に弟がいましたが、上の三人は夭折し、一人残った姉も養女に出されています。私も、生後半年で水社の福建系の石家に養女に出されました。その後、養父母は 5 歳の時に埔里の近郊に移りました。埔里は盆地で、周囲には先住民が住んでおり、養父の父は、先住民の少年を下男として使っていたそうです。

上の三人が夭折したのには、祖母との不倫の末に果てた男にまつわる怪談めいた不可解な事件が関わっておりました。それは、祖母が浮気をしているのに気付いて激高した祖父が、浮気相手の男を銃で撃ったというのが事件の発端でした。急所を外れていたので命拾いした男は、早速医者に掛かったのだそうですが、腹の虫の治まらない祖父は、その医者を買収して男に毒を盛らせたとのことです。

男が無念の死を遂げて何日か経ったある日、突然私のきょうだいたち三人が一日のうちに亡くなってしまいました。何でも、それまで元気だったのが、まず一人が朝の 9 時頃に倒れて顔が蒼白になり、そのまま息を引き取ってしまったのだそうです。すると、残った二人のきょうだいも一人は昼頃に、もう一人は夕方に、やはり顔面が蒼白になって亡くなってしまったとのことです。

母は、狂人のようになって嘆き、それまで信仰してきた神様に、「10 年以上も熱心にお祈りしてきたのに、なぜ子供三人を見殺しにしたのか」と悪罵を浴びせて投げ捨ててしまいました。後で、神様が他の人に乗り移り、「男は自分の手の届かないとこ

ろに行ってしまったので、自分にはどうしようもなかったのだ。このままでは、残った子供も危ないから、早く男に謝罪して冥福を祈れ」という神託を授けたのだそうです。それで、言いつけ通り、早速供え物を捧げて男に謝罪し、「残った子供だけでも助けてください」と懇願して冥福を祈ったところ、その後は死者が出ないようになったとのことです。

実母には、14歳の時に初めて会ったのですが、その際、「お前は運が良かったよ。養女に出していなければ、あの時、お前も一緒に死んでいたよ」と冗談に紛らわして振り返っておりました。

また、私が10歳の頃、土建会社の親方だった実父の兄が煉瓦を積んでいたのですが、突然煉瓦が崩れ落ちてきて、その下敷きになり、亡くなってしまったのだそうです。その報せに悲観した祖母は、その日のうちに首を吊って息子の後を追い、一日に二人の葬式を出したとのことです。

そんな不思議で不幸な事件がありましたが、実父は私が四歳の頃、既に肺病を患って6人の子供を残し、32歳で逝ってしまっておりました。私は、小さな白い三角の頭巾を被せられ、伯父の胸に抱かれて葬儀に参列したことを覚えています。その際、実母に会ったはずですが、どうした訳か記憶にありません。

実母は間もなく再婚し、さらに息子と娘が生まれました。14歳の時、実母に初めて会った時には、子連れの男と三度目の結婚をしていて、女の子が二人生まれておりました。

私の養家は中農で、二人子供がいたのですが、夭折してしまったので、私を養女にしたのです。その後、養父母に4歳下と7歳下の妹が出来、さらに10年ほど間を置いて弟が生まれました。

養家は、最初はトタン葺でしたが、後で瓦葺になりました。電気や水道は通っていませんでしたが、水は山から竹の筒で清水を引いて来て、コンクリートの桶に溜めて使っておりました。

養母も養女だった人で、自分の養母に叩かれてばかりいたそうです。その鬱憤を養女である私に対して晴らそうとしたのか、養母は大変厳しい人で、8歳から御飯炊きをさせられ、ことあるごとに叩かれておりました。朝から炊事、洗濯、水汲みと扱き使われ、自分ほど運の悪い人間はいないと思われるほど悲惨な境遇でした。

それでも、養父の意向で埔里公学校に通うことになりました。学校は、一学年四クラスで、男組が二クラス、女組が二クラスでした。学校まで、歩いて1時間半の道のりで、炊事をして御飯を食べてから学校に行っていたのですが、いつも遅刻して教壇に立たされておりました。ただ、成績は良くて、一年の時は一クラス73人のうち三番で、二年では65人のうち二番でした。同級生のうち、8人は成績が振るわないので落第しています。

一年生の時の先生は台湾人の男の先生でしたが、二年生の時の先生は沖縄の男の先生でした。三年の時は、内地人の女の先生でした。養母には良く叩かれましたが、先生に叩かれることはありませんでした。

学校には、カーキ色の制服にスカートをはいて行きましたが、夏は白いシャツに黒いスカートでした。靴はなく裸足でした。カバンはなく、風呂敷を手にして通っていましたが、中には手提げカバンを持っている子もおりました。弁当は、米ではなく、芋を摩り下ろしたのを焼いたものでした。夜は、ガラス瓶を利用した手製のランプで勉強していました。

三年になったある日、養父の弟の妻が養父母に、「この子は頭が良いから、このまま勉強させたら、この子に財産を全部取られてしまうよ」と告げ口したのでした。それを真に受けた養父母は、私に、もう学校には行くなと命じたのでした。結局、三年の一学期で、学校を中退させられてしまいました。日本語が良く出来ないうちに学校を辞めさせられてしまったわけです。

その後、友達と夜間の国語講習所に半年ぐらい通って日本語を勉強しました。講習所でも成績が良かったので、講習所の先生が養父母に、「お宅の娘さんは頭が良いから、もう一回公学校に通わせたらどうですか。そうすれば将来良い婿さんを迎えられて、家のためにもなりますよ」と説得してくれたのです。養父は賛成してくれたのですが、養母は最後まで頑として首を縦に振りませんでした。そんなこともあって勉学の意欲をなくし、また暗い山道を通ると良く蛇に出遭って怖かったので、講習所も辞めてしまいました。

養父は養母と違って馬鹿正直だったので、よく籾の分配などで叔父さんに騙されて損をしていました。余りに酷いので、ある時、「お父さん、計算が合わないよ、叔父さんに騙されているよ」と教えてあげました。私は三年で公学校を辞めましたが、掛け算や割り算まで習っていたので計算が出来たのです。すると、叔母さんが「ちゃんと計算したのにどこが間違っていると言うの。玉花の言っていることは全部デタラメだ」と言って、私に散々悪態をついたのです。私は、どうしたわけか小さい頃から叔母さんには憎まれていて、私が公学校を止めるようになったのも叔母さんの告げ口が原因でした。

公学校を止めてからは、入学前からの仕事であった水牛の番をしていました。雨が降った時だけ休みで、毎日家事をこなして水牛の番をするという生活でした。ある時、水牛に引っ張られて縄が指に食い込み、出血が止まらなくなったことがあります。親類の病院で治療してもらい、そのまま、その親類の家に泊めてもらうことになりました。その家は、薪ではなく、石炭を燃やしておりました。薪集めが重要な日課だった私には、薪を燃やさずに済むというのは羨ましい限りでした。

その後、13 歳で日雇いに出ました。日当は 50 銭でした。昼は、地豆を挽いたり杉

の伐採やキャッサバの擂り下ろしをしたり、夜は家事や水門の番もしておりました。服は二着だけでした。一着を身に付け、別の一着を洗濯すると、もう着る物がなくなってしまうのです。一度などは、雨に降られてしまいましたが、着替えがないので、いったん脱いで絞り、それをまた着ていたのです。

私は8歳頃から、養母に頭から血が流れるほど棒で酷く折檻されておりました。14歳の頃のある日、干し大根を雨に濡らしたと言って、養母に棒で腕を酷く叩かれておりました。それを見かねた養父が「そんなに酷く叩いて腕でも折れたらどうするんだ。一生面倒見なければならんぞ」と止めたのですが、養母は意に介さず、「そうなったら、あんたの妾にしたらいい」と毒突いて叩き続けたのでした。

あまりにも悔しかったので、川原での洗濯仲間の近所の小母さんたちに訴えると、「あんな酷い養母、お母さんと呼ぶことない。『竹鳥（＊養母の名）』と名前で呼んでやれ」と慰めてくれたのです。現在でしたら、とっくに逃げ出していたでしょうが、当時は逃げようにも逃げるところがなかったのです。養女というよりは「サボーカン（査某嫺）」という女奴隷のような境遇でした。実際、近所の3〜4歳下の養女も、養父に袋に入れられて吊るされ、折檻されたことがあると嘆いていたことがありました。

当時、私は二年余りしか学校に通わず、皇民化教育を受けなかったので、自分のことを日本人とか支那人とかは思わず、ただ台湾人とだけ思っておりました。自分の先祖が福建省から来たということも知らずに暮らしていました。支那には全く関心がなかったのです。ですから、無学な両親や近所の人たちも支那への復帰や独立などは全く考えずに現状を運命として受け入れて暮らしていたのでしょう。

日本語はろくに話せませんでしたが、当時の田舎では日本語は余り通じず、また内地人との接触も別になかったので、話す必要もなかったのです。内地人に対しては、交流がなかったので、別に反感も好感もありませんでした。

天皇に対しても、どう言う訳か、先生から話を聞いた覚えはありません。ただ、乃木大将については先生から話を聞いたことがあります。両親や近所の人も天皇に対しては無関心なようで、話はしませんでした。台湾の田舎では、天皇のことは意識せずに暮らしていたようです。まして、清朝の皇帝に対しては全くの関心外でした。

当時、埔里は田舎でしたから、戦時中でも時々敵の飛行機が通過して、時折焼夷弾を落としていく程度だったので、戦争をしているという実感は余りしませんでした。ただ、伯母の孫や、養母の兄の息子が軍隊に入って南方に行っていましたが、結局帰って来ませんでした。

私は16歳の時、埔里で終戦を迎えました。終戦の報せを聞いても、別に悲しいとか嬉しいとかはなく、ただ「これで戦争は終わったのか」ということだけでした。毎日の生活に追われていたので、台湾が将来どうなるのかということも別に考えませんでした。

終戦後は、農家の手伝いをしておりました。ある日、エンドウ豆を千切って収穫する仕事をしていたところ、男の人が手伝ってくれたのですが、その姿を村の人に見られてしまい、早速噂を立てられてしまいました。その人は、公学校を出て漢方店に勤めていたのですが、後に軍隊に入って、埔里で終戦を迎えたのだそうです。

その人は、私より5歳上でしたが、すでに媳婦仔の妻がおりました。ただ、自分の意に反して結婚させられたので夫婦仲は良くなく、子供もいませんでした。

そのうち私たちのことが、村の人の口に上るようになりました。年頃の男女が二人きりでいるところを人に見られたら、大変という時代でした。村の人たちには、「所帯持ちの男と付き合うとは全くけしからん。男を惑わす悪い女だ、殺してやる」と脅迫されるようになりました。それで、私は一旦実母のいる頭社に移ることにしました。

当時の田舎では、男の人との噂を立てられたら、もうまともな結婚は望めないと言われておりました。その人には「男でも女でも子供が出来たら絶対捨てない」と言われたので腹を決め、一週間ほどしてから埔里へ戻って結婚することにしました。養父母は何も言いませんでした。厄介者を金を掛けずに追い出せるので、渡りに船と思っていたのでしょう。その人の媳婦仔の妻は、ここが潮時と思ったのか、自分から出て行ってしまい、再婚して子供が出来たそうです。

私たちは埔里で新しい生活を始めたのですが、ことあるごとに人々に誹られ、とても埔里には住めるような状況ではありませんでした。それで、基隆の近くの炭鉱で石炭の運搬の仕事を始めました。その後、金瓜石で砂金取りをして小金を蓄えました。

その頃、石垣島に住んでいる夫の兄から「石垣島に来ないか」という誘いを受けたのです。石垣島にはパイン栽培やサトウキビ栽培で、昭和の初め頃から台湾人が移民として渡っていたのです。台湾にいては、土地も財産もない私たちには将来の展望が開けないということで、新天地に人生を賭けてみようと決めました。それで、1949年の一月に、蘇澳から生後三ヶ月の長男を抱いて闇船に乗り、与那国島経由で石垣島に渡りました。

石垣島に来てみると、街の中でも電気は通っておらず、水道もありませんでした。馬車に水を汲んで来て売っていたのです。埔里は中心街が舗装されていましたが、石垣は中心街でも砂利道でした。家は、ほとんどが侘しい茅葺きでした。当時の石垣は、埔里よりもインフラがずっと劣っていたのです。

当初、名蔵のカードという、街から歩いて一時間半ほど掛かる所に入植し、他の台湾人10世帯と一緒に開墾を始めました。皆福建系でしたので、台湾語で話しておりました。三町歩ほどの土地を市から払い下げてもらい、陸稲やパイン、芋の栽培を始めました。家は六畳一間ぐらいで、屋根は茅葺きで壁はススキでした。板敷きではなく竹の寝台にゴザを敷いていました。電気や水道はもちろん、台所もなく、石で造った竈一つと鍋が二つあるだけでした。風呂もなく、近くの小川で水浴びするのがせい

ぜいでした。

主食は芋で、石垣島に来て三年間は芋しか食べられませんでした。カードに住んでいた頃は、マングローブでハマグリを採ったり、メダカを塩と一緒に一升瓶に詰めて発酵させ、調味料として他のおかずに添えて、芋と一緒に食べておりました。生活は、台湾にいた時よりも苦しい状態でした。

1964年の一月頃、次女が生まれたのを契機にして、カードを離れて街で「永楽食堂」という名のそば屋を始めました。しかし、お客の入りが思わしくなかったので、今度は「アップル青果店」という名の八百屋を開くことにしました。街での商売も大変で、内地から野菜を取り寄せても、冷凍コンテナがなかったので全部腐っていたということもありました。それでも、何とか商売を軌道に乗せ、子供たちとともに現在まで続けてきました。時には、息子の不始末で大きな負債を抱えたこともありましたが、何とか返済して、今は落ち着いた生活です。夫には先立たれてしまいましたが、子供は7人、孫は27人、曾孫は38人と子孫には大変恵まれています。人数は多いですが、子孫たちの名前と誕生日は全員覚えております。

1964年に、他の4世帯と一緒に帰化をしましたが、私たちが帰化の第一号でした。帰化の費用は100ドルでしたが、当時は一ドルで一家9人が一日生活できましたから、私たちには大金でした。それでも帰化をしたのは、外国人のままだと銀行の融資も受けられないし、子供の職業も限られてしまうからです。帰化した後も、八重山華僑総会には参加してきましたし、名蔵にいた時から土地公祭には毎年参加しています。現在、石垣島には台湾系の人たちが800人ほど暮らしており、今では完全に地元に根を下ろしています。

2015年には、久し振りに娘や孫たちと一緒に台湾に里帰りしました。昔の面影が消えてしまった故郷の変貌ぶりに、改めて歳月の長さを感じさせられました。翌年には、その時の体験を基に、石垣島に移住した台湾移民のドキュメンタリー映画の『海の彼方』が製作され、私は主役として出演しました。子孫たちへの良い置き土産になったのではないかと独り得心しております。

おわりに

以上、日本統治時代50年の後半期の台湾に暮らした総計56名の生活誌を紹介してきた。その内訳は、日本人が20名（＊男性9名、女性11名）、台湾人が26名（＊男性13名、女性13名）、先住民が10名（＊男性7名、女性3名）である。生年を見ると、1907年から1933年までに亙っている。その内訳を見ると、1919年以前は14名（＊男性11名、女性3名）、1920年代は34名（＊男性14名、女性20名）、1930年代は8名（＊男性5名、女性3名）である。

台湾の平地における抗日運動は、1915 年の西来庵事件（＊台湾では「タパニー事件」と称している）を最後に終息している。山地では、1930 年の霧社事件を契機に鎮静化している。それゆえ、本格的な空襲の始まった終戦前の一年間を除けば、大部分が平和で安定していた生活を送っていたということになるだろう。

ただ、台湾人や先住民に関して言えば、一般的に、今日語られているほど皆が親日的ではなかったというのが筆者の率直な感想である。中には、侮蔑的な扱いを受けたことがあると証言している者もいるが、接触した日本人が皆善良な人間とは限らず、台湾人や先住民を蔑視するような者がいても不思議ではないであろう。

日本人に関しては、一般的に、台湾人や先住民に対して露骨に蔑視するというようなことはなかったと言うが、やはり支配民族としてある程度の優越感を持って付き合っていたということは否めないだろう。それでも、少なくとも周りの台湾人や先住民とは仲良く付き合っていたとのことである。

筆者が日本統治時代の台湾の社会状況に関心を持つようになったのは、同じく当時の朝鮮の社会状況を調査していたのが発端である。台湾での調査を始める三年ほど前から現在まで、休暇を利用して年に 3〜4 回ソウルに出張し、日本統治時代の教育を受けた韓国人の男女約 60 名との面接調査を行っている。同時に、国内では日本人の男女約 70 名の調査も行っている。最初は、韓国だけのつもりであったが、韓国の調査だけでは理解しにくい点が幾つか出てきたので、同時代に日本の統治を受けた台湾を調査に加えたという訳である。

その結果は意外なもので、韓国の場合、当時の日本や日本人に対する不平や不満を述べた者は少数で、大多数は学校時代や日本人との交流のことを懐かしげに語ってくれている。それに対して、台湾の場合、親日の台湾として知られているように日本時代を懐かしむ人がいた反面、当時の日本や日本人に対する反感を露わにする者が韓国人の場合よりも多かったということである。

この根源的な理由は、建前上、独立国同士の合邦として日本に統合された韓国と、日清戦争の結果、戦利品として日本に割譲された台湾との違いに由来しているのであろう。つまり、当時の日本にとって戦略的に重要であった朝鮮は優遇し、南進基地に過ぎなかった台湾は相対的に冷遇したことに起因するものと思わる。それは、特に官吏や貴族、軍人の登用や授爵、昇進などの違いに端的に現れている。

例えば官吏の場合、朝鮮では内地の県にあたる道が 13 道あったが、35 年間の統治で朝鮮人の知事が総数 42 名任命されている（＊終戦時は 13 名中 5 名が朝鮮人の知事）。道の下の郡では、大多数が朝鮮人の郡守であった。一方、台湾では内地の県にあたる州が 5 州あったが、50 年間の統治で台湾人の知事は一人もいない。また、台湾には 50 を超える郡があったが、50 年間で台湾人の郡守は僅か 5 名に過ぎない。

貴族の場合、朝鮮の皇族は朝鮮王公族に、貴族は朝鮮貴族として日本の華族と同等

の待遇を受け、合邦後、侯爵が7名、伯爵が4名、子爵が20名、男爵が36名の総数67名が爵位を受けている。一方、台湾では、日本軍の台北入城を助けて台湾統治に協力し、後に貴族院議員に勅選されている辜顕榮でさえも平民で、50年間を通じて一人の男爵すらも授爵されていない。

軍隊においても、朝鮮の場合、朝鮮王族の李垠陸軍中将を始め、朝鮮王国時代からの軍人で陸軍大学校を出ている洪思翊陸軍中将など中将が総計6名、少将が3名、大佐が4名、中佐が1名、少佐が2名任官されている。一方、台湾の場合、朝鮮より15年早く日本に統合されているのにもかかわらず、将官級はおろか佐官級もおらず、軍医で中尉に任官されたのがせいぜいであった。

つまり、台湾の場合、清朝時代を通して植民地的な支配を受けていたため、役人や軍人は全て大陸から派遣された人間であったが、割譲後は全員大陸に帰還してしまい、その穴を埋めたのは、全て日本から派遣された役人や軍人だったのである。そして、終戦までほとんど日本人に独占される状態が続いたので、有能な台湾人に不満が溜まったのは当然のことであったろう。また、日本統治の後期には中国との戦争が始まり、台湾人は敵国の中国人と先祖を同じくする者と思われていたため、「チャンコロ」などと侮蔑される場合があったということも大きく影響していると思われる。

朝鮮の場合、建前上は合邦であるから、王室も残して厚遇し、また、行政機構や軍も旧来の組織を改組・統合しているため、朝鮮人の役人や軍人も可能な限り任用している。その結果、終戦まで一定の割合で官職が保証されていたため、有能な朝鮮人は、郡守はもちろん望めば道知事にまで昇進可能だったのである。また、中国との戦争が始まってからは、朝鮮人は中国人とは先祖を別にするが、日本人とは同じくする者たちだということで、「内鮮一体」を唱えて台湾人よりも朝鮮人を優遇していたのである。その一例が、創氏改名の際に、戸主の朝鮮名での創氏（＊家族名）の他に、日本名での創氏を無条件に認めたことである。台湾の場合、本人が日本名での改姓名を望んでも、家族の中に日本語を解しない者がいたら認められなかったのである。

内地人の証言は、大体似たような経験を語っている場合が多かったように思われる。それは、当時の台湾や朝鮮に住んでいた内地人は、役人や商業に従事する者が多く、大多数が支配階級として裕福な暮らしをしているのが普通だったからであろう。

支配階級であるから、一般の台湾人や朝鮮人に対しては内心優越感を持っていたことは否定できないが、それでも露骨に侮蔑したり迫害したりするというようなことはなかったということである。中等学校に進学する台湾人や朝鮮人は、たいていが裕福な家庭の子弟であったので、身なりもきちんとしていて成績も優秀な者が多かったそうである。そのため、馬鹿にする気持ちは起こらず、少なくとも同級生同士は仲良く付き合っていたとのことである。

内地人の証言で印象に残っているのは、台湾の各地を警察官として勤務していた父

が、終戦後、引き揚げで30年振りに故郷の鹿児島の田舎に帰った時に漏らしたという言葉である。トラックの荷台に座って田舎の砂利道を故郷に向かって走っていったのだが、次第に父は無口になっていき、いよいよ実家に近づくと、呻くように「30年前と同じだ……。何一つ変わっていない……」と呟いたのだそうである。

〈完〉